合意形成および組織形成の基盤理論としての完全論

― 自由主義クエーカー思想の諸類型と合意形成論・組織論の問題点 ―[1]

Perfectionism, Basic Principle for Decision-Making and Social-Shaping: Types of Liberal Quakerism and Problems of Their Decision-Making and Organization Theories

中野 泰治
Yasuharu Nakano

キーワード
クエーカー、合意形成、組織論、完全論、U 理論

Keywords
Quakers, Decision-Making, Organizational Theory, Perfectionism, Theory U

要旨

沈黙の礼拝で有名なクエーカー（フレンド派）は、19世紀初頭に三つの流れ（ヒックス派［20世紀からは自由主義］、正統派［後の福音派］、ウィルバー派［後の保守派］）に枝分かれしながらも、特殊な集会様式（福音派でも沈黙の時間を設けるところがある）を約370年に亘って保持してきた。それとほぼ同等の期間[2]、17世紀後半期から保持されてきたものが業務集会（Business Meetings）における合議形式である。彼らの合議形式は、簡単に言えば、沈黙の内に祈りを合わせ、最後の最後まで異質な意見に開かれつつ、話し合い、集会としての一致（unity）を目指すというものである。本稿では、特にドグマを持たないがゆえに多様化してしまった20世紀来の自由主義クエーカーの信仰類型に着目し、それぞれの類型における合意形成・組織（教

会）形成のあり方について検討する。そして、特に主としてユニバーサリズム（Universalism）にカテゴライズされる自由主義クエーカー信仰における合議形式（特にU理論を援用した合議形式）の問題点、つまり対話と言いながらも、自己充足的な理論的構図がこうした対話を危うくする要素を持つことを示す。

SUMMARY

This article investigates diversified Liberal Quakerism in the 20th and 21st centuries and to examine the decision-making styles in each type of Liberal Quakerism. Quakers, who hold a silent meeting as worship, diverged into three strains (Liberal Quakers, Evangelical Quakers, and Conservative Quakers) in the early 19th century, but they have all maintained their particular meeting styles up to today. They have also long carried on the tradition of a business meeting and its procedure of decision-making since the latter part of the 17th century. Simply speaking, in their business meetings, Quakers pray for God in the style of silent meeting and talk with the other participants about issues on the business agenda, opening themselves to different opinions to the last person so that they can exercise communal discernment and reach a sense of unity. This article shows that there are some problems in the business style of Universalist-Liberal Quakerism, with this position supported particularly by Theory U. Specifically, Universalist-Liberal Quakerism has such a self-isolating and self-contained structure that it would become impossible to continue dialogue in their business meetings.

はじめに

業務集会は、17世紀後半頃から元々は信仰を理由に迫害、逮捕された信徒の状況把握と彼ら／彼女ら（および家族）の救済のため、また財産の管理のために、主としてジョージ・フォックス（George Fox, 1624–91）の活動を通して創られた集会であり、後には結婚や葬儀などの様々な集会の業務に携わるようになったものである[3]。業務集会は、それぞれの地区において月一回、礼拝形式（沈黙の礼拝）に基づいて執り行われる。彼ら／彼女らの合議は、多数決や討論の力による勝敗に合意の根拠を置くのではなく、すべての参加者の関心の表明と共有、反対者への配慮、そして高度なレベルにおける最終一致に至るまで多様な声に耳を傾け続けることから成っている。こうした合議形式自体は、三世紀半に亘って変わっていないが、今日では宗教的な枠組みを超えて、世俗の一般組織でも“Quaker based-model”として使用され始めている。合議形式に関する文献は数多く存在する。しかし、そのほとんどはマニュアル的

なものであったり、信仰告白的なもの、もしくは体験に関する雑駁な記述的説明に留まっており、学術的なレベルで研究・分析されたものは数少ない。数少ない学術研究のうち代表的なものは（20世紀初頭のクエーカー研究者 Rufus M. Jones, William Braithwaite, Elton Trueblood などによる古典的なものは除いて）、イエズス会の会議の伝統（共同体主義的な伝統）を回復するためにクエーカーの合議を研究した Michel J. Sheeran によるもの（1983）[4]や、紛争解決の方法としてクエーカーの合議形式に注目した Anthony Bradney と Fiona Cownie によるもの（2000）[5]、クエーカーの合議形式が科学的な共同研究に有用であると主張する Gray Cox によるもの（2014）[6]などが挙げられる。これらの研究に共通する議論の要点は、クエーカーの合議形式に特有の性質とは**異質な他者に開かれた態度（openness）**と**共同識別（communal discernment/corporate discernment）**である（こうした性質は必ずしもクエーカーだけというわけではない）。しかしながら、これらの研究では、信仰の多様性とそれに伴う合議形式の多様な理解モデルを正確に区分けすることなく混同して議論している点が残念である。後に詳細に検討するが、クエーカーの信仰形態は大きく、「キリスト中心主義」（Christocentrism）なものと「ユニバーサリズム」（Universalism）なものに分けられる。本稿の分析対象である自由主義クエーカーでは、後者の立場、つまりユニバーサリズムの立場に立つ信徒が多い。その信仰内容は、自由主義クエーカーの唱道者であったルーファス・M・ジョーンズ（Rufus M. Jones, 1863–1948）の思想を分析した拙稿[7]で指摘したように、自己回帰的、自己充足的なネオ・ヘーゲリズムに基づいた信仰である。自己充足的な信仰に基づく合議では、異質な他者への開けよりも、自己の拡大への関心が強くなりがちである。本稿ではこの自由主義クエーカーの問題について、共同識別における一致（内なる自己と大いなる自己の一致）に概念的に大きく関わることになる「完全論」を分析軸にして検討したい。第一章では、クエーカー信仰の類型と合議形式の基本について概観し、第二章では、ネオ・ヘーゲリズムの影響によって変質した自由主義クエーカー信仰について見る。そして、第三章では、自由主義クエーカーの（特に U 理論によって援用された）合議形式について分析し、問題点を探る。

第一章　クエーカー信仰の四類型と合議の基本形式

第一章第一節　クエーカー信仰の四類型

> Worship is the response of the human spirit to the presence of the divine and eternal, to the God who first seeks us. The sense of wonder and awe of the finite before the infinite leads naturally to thanksgiving and adoration.

Silent worship and spoken word are both parts of Quaker ministry. The ministry of silence demands the faithful activity of every member in the meeting. As, together, we enter the depths of a living silence, the stillness of God, we find one another 'the things that are eternal', upholding and strengthening one another[8].

（「礼拝は、人間の精神が神性と永遠、つまりまず初めに我々を捜し求められた神の現れに応答することである。無限を御前にして有限性に対して感じる驚嘆と畏れの感情は、当然のこととして感謝と崇拝の念へと導く。

沈黙の礼拝と感話はクエーカーの宣教の両輪である。沈黙による宣教は集会に参加するすべての人々に信仰深い働きを求める。共に信徒達が、生き生きとした沈黙、神の静けさの深みに入り込む時、我々は相互に『永遠なるもの』を見いだし、その『永遠なるもの』が相互を励まし、力を与えるのである」。）

上の文章は、各時代の書物の文章をまとめたアンソロジーで、いわばクエーカー信仰にとって指針的価値を持つ *Quaker Faith & Practice* からの一文であるが、自由主義クエーカーの集会に初めて参加する人々の多数が感じる感想は、上記のアンソロジーや信仰のしおりやパンフレットに書かれたキリスト教的な信仰形態とは異なり、つまり沈黙のうちに忍耐強く聖霊の働きを待ち望み、聖霊の促しに従い感話を述べるという集会の記述とは違って、実際は、信徒は聖書の言葉、また「イエス」や「神」といった言葉を用いることなく思い思いの個人的な気持ちや感想を表明することが多いため、何が何だかよく分からず理解できないということである。この違和感には十分な理由がある。クエーカー（特に自由主義クエーカー）は伝統的に教義を定めることを避けてきたため、現代の自由主義クエーカーの信仰は伝統的なキリスト教の枠組みを超えて多様化しており、また集会は単に個人のスピリチュアル・ジャーニーを共に探求する場と見なされることから、多くの場合、集会で表明される言葉に一定の纏まりが見られないためである。

シーラン（Michel J. Sheeran）によれば、自由主義クエーカーを含めた現代クエーカーの信仰形態には大きく分けて二つ、細かくは四つあるという。まずクエーカーの信仰は、一方の極に**（1）「キリスト中心主義」**（Chrisitocentrism）があり、それはさらに二つのサブカテゴリー、つまり**（1-a）**聖書の言葉をすべて真実として直解的に捉える「根本主義クエーカー」（Fundamentalist Quakers：アメリカの福音派クエーカーに多い）と**（1-b）**「キリスト中心主義クエーカー（クリスチャン・クエーカー）」（Christocentric Quakers）に分けられる[9]。キリスト中心主義の信仰は、いわば現代に一般的なメインラインのキリスト教教会の立場と似たものである。そして他方の極に、**（2）「ユニバーサリズム」**（Universalism）が存在し、それはさらに二つのサ

ブカテゴリー、つまり（2-a）世界のすべての人々、異なる宗教の人々も救われる可能性があると考える「ユニバーサリスト・クエーカー」（Universalist Quakers）[10]と（2-b）信仰よりもクエーカーの社会活動に惹かれて信徒となった「博愛主義者」（Humanists）に分けられる[11]。英国（自由主義クエーカー）を例に挙げれば、多くの信徒が立つ立場は、（2）の「ユニバーサリスト」である。つまり、英国のクエーカーは、少数の（1-b）「キリスト中心主義者」と、多数の「ユニバーサリスト」（および「博愛主義者」）が混在し、時には対立する状況にある（アメリカの自由主義クエーカーも同様の状況）[12]。こうした信仰理解の相違は、当然のことながら、彼らの合議形式の理解モデルの違い、合議に至るまでのストーリー解釈の相違にもつながるが、次節では、まずは基本となる伝統的なキリスト中心主義の合議形式について解説したい。

第一章第二節　伝統的なクエーカーの合議形式

沈黙（人間的な働きの否定）において内なる光（Inward Light：内なる神、内なるキリスト、聖霊）の働きかけを受けた人は、内なる光の働きに反抗せず、それに従うならば、キリストと共に十字架に架けられ、罪において死に、そしてキリストと共に再生する[13]。これがクエーカー的な意味での救済（義認）であるが、義とされた者はキリストに倣って実際に完全に義となること（聖化）が求められる[14]（時の完成が迫るとする前千年王国説の影響下で義認と聖化の完成が同時に起こると捉えた最初期クエーカーとは違って、終末思想が退行した17世紀後半以降の信仰においては、人間は完全に至ることが出来るが、それは常に成長を伴うものとされた）[15]。神の子としてキリスト者がなすべきことは、神を愛し、隣人を愛することである[16]。キリストご自身が示されたように、敵対者をも愛することである[17]。クエーカー信仰における完全の基準は、この敵対者に対する愛、異質な者への開けに置かれる[18]。というのは、敵を愛し、受け入れることは人間的（この世的）なあり方にとって最も困難だからである[19]。

この「完全」の概念に、クエーカーの教会観（組織論）は基付けられる[20]。伝統的なクエーカーにとってキリストの身体たる教会とは、世界中の聖化された聖徒から成るもので[21]、その主たる目的とは真の信仰の維持と聖徒全体の一致のための教化である[22]。「彼らは、心が愛によって一つに結びつけられ、…同じ真理において教えられながら、神を待ち望み、神を礼拝し、…誤りに対して真理の共同の証をなす為に、共に集まり、集い、会合を開く」[23]。また教会は、キリストの身体であろうとする限り、この世と神の国の間にある隔たりを架橋する努力をしなければならない。つまり、教会は、至上の掟である「敵対者への愛」（完全）を体現する可能性の場であらねばなら

ず、またキリスト教的理想を現実世界で実現し、この世に聖なる模範を示さなければならない[24]。平和主義や奴隷解放運動、監獄改善運動や精神科病院改善運動といった熱心な社会活動はこういった理由による。

こうした教会観（組織論）に基づいて、伝統的なクエーカーの合議形式は、上でも述べたが、多数決や討論の力による勝敗に合意の根拠を置くのではなく、すべての参加者の関心の表明と共有、反対者への配慮（敵対者への愛）、そして高度なレベルにおける最終一致に至るまで多様な声に耳を傾け続けることを基本形式とする[25]。共同識別に至ると、書記（Clerk）がそれを“the sense of the meeting”（集いの意識）として感じ取り、議事録にまとめる[26]。反対者への配慮は、神学的には「現在（presence）」と「超越（transcendence）」を表象するキリスト論に基づいて[27]、また実践的には聖徒はそれぞれ異なる賜物を与えられたゆえに[28]、誰も真理の全体を把握することはないという認識に基づく[29]。なお、この一致は、他の見解が存在する限り、もしくは他の見解を持つ者が譲歩しない限り、常に決定は延期される、つまり異質な他者に開かれることを常に重要視するのである[30]（決定の遅延という欠点があるが、この点については、現代の合意形成論の文脈のなかで稿を改めて論じたい）。

なお、第三章での議論との関連で、キリスト中心主義的な合議形式におけるテクニカルな部分に関しても言及しておこう。バリー・モーリー（Barry Morley）によれば、「集いの意識」に達するためには三つの要素が必要であるという[31]。一つは“release”（解放）、二つは“Long Focus”（広い視点）、そして、三つは“Transition to Light”（光への移行）である。**（Ⅰ）**「解放」は、業務集会で議題が提示されたとき、そのとき持っている感情をすべて手放し、心を開き、すべての人々の意見を「愛」をもって聞くことである。そうした態度がそれぞれの話し手にも安心感を与えることになる[32]。**（Ⅱ）**「広い視点」は、いくら自分の意見に自信があるとしても、性急な発言や競争的雰囲気から生じる狭い視野から抜け出ることである。そのための一つの手段として、話し合いの途中に沈黙の時間を設けることが大切とされる[33]。**（Ⅲ）**「光への移行」は、決定は神の導きから来るという信念である。神の光の働きかけを待ち、それに与ることで、各々に与えられた光（伝統的なクエーカー信仰では、各々の内なる光は分割不可能な一つの光である[34]）において変化させられ、集会の一体感・調和の醸成につながると、モーリーは語る[35]。要するに、我々は光の導きにより真理へと導かれるが、その真理は一部の真理に過ぎず、他の多様な意見を必要とする。自分の見解に固執せず、広い視野を持ち、異質な意見に最後まで開かれることで、「全体による識別」が醸成されたところに一致が生み出されるということである[36]（「一致」は、シンフォニーに喩えられることが多い[37]）。

第二章　自由主義クエーカーの信仰：ネオ・ヘーゲリズムの影響

上述のように自由主義クエーカーの信仰は多様で、キリスト教の枠組みを大きく超えた部分がある。集会には、第一章で扱った少数派のキリスト中心主義者（クリスチャン・クエーカー）のみならず、ムスリム・クエーカー、ブディスト・クエーカー、人格神を認めないクエーカーなども出席している[38]。ユニバーサリストのクエーカーにとって、クエーカー信仰とは一般的意味での「信仰」ではなく、「生き方」であり[39]、人生の様々な出来事に揺さぶられながらも、常に真理を共に探し求め進むことである[40]。ある意味で、「神」は彼らにとってはオプションに過ぎない[41]。彼らは神学や宗教的議論には関心がないため、博愛主義者や無神論者をも含むユニバーサリスト・クエーカーの信仰について一般的な定義を与えることは難しい[42]。上述のモーリーは、こうした信仰に関心の薄いクエーカーの状況を“Doughnut Quakerism”と呼ぶ[43]。しかしながら、そうした多様な信仰においてなお共通して見られるのが、用いられる言葉は違えど、自己（self）と大いなる自己（Larger Self）の親密性（intimacy）への希求、経験、そして確信である[44]。ここでは、こうした大いなる自己との親密性を説く全く新しい自由主義クエーカー信仰を最初に作り上げた（上でも既に言及した）ジョーンズの思想について概観したい。ジョーンズの思想は、ユニバーサリスト・クエーカーにも影響を与えている[45]。

現代のクエーカー研究とネオ・ヘーゲル主義との関係性について論述した拙稿[46]の議論の繰り返しになるが、その一部をしばらく追って見る。ジョーンズを代表とする20世紀来の自由主義クエーカーは、トーマス・ヒル・グリーン（Thomas Hill Green, 1836–82）、ジョージ・ハーバート・パーマー（George Herbert Palmer, 1842–1933）、ジョサイア・ロイス（Josiah Royce, 1855–1916）といった19世紀末頃に活躍した英米の新ヘーゲル主義者の思想の影響を受けて[47]、クエーカー信仰の中心概念である“Inner Light”（伝統的な言い方は“Inward Light”で、人間の心の機能ではなく、神からの働きである）を**人間の心の機能である理性、良心、（無）意識の働きと読み替え、この（無）意識とはすべての人々に内在化された神の意識、世界の意識**としての“That of God in everyone”であると考えた[48]。そして、この内在する神への自発的な応答をすること、また他の人々に内在する神性（善性）に応答することによって神や他の人々との一致に至ることができると信じた[49]。ジョーンズは次のように語る。「人間には、真理を認識し、愛に応答し、そして正義に同意する能力が与えられている」[50]。ジョーンズによれば、この能力とは人間の良心（conscience）の働きであり、この良心の働きを通して、神へ応答することによって救いに与ることができるという[51]。**この神の救いは、神との根底的一致を認識することで真の自己（true self）の**

完成へと至る決断でもある[52]。そしてジョーンズは、それぞれの人が全人的な完成に至ることでこの世界が完成され、この世において神の国が実現することを信じた[53]。ここではキリスト教信仰が、**人間の有限な自己（finite self）が発展的に全的な自己（the whole self）へと到達する自己実現の過程として、また人間の信仰そのものが神自身の自己発展の過程として描かれている**[54]。こうした信仰観はジョーンズの同僚であるブレスウェイト（William C. Braithwaite, 1862 -1922）にも見られ、彼もこの世界を神の意識の自己発展であり、人間の発展もその神の自己展開の一部であると見なす[55]。このようにして人間の自己が真の自己、全なる自己を発見するとき、その全なる神の自己は世界のすべての存在を根拠付け、意味を与えるものとしての役割を果たし[56]、そしてその自己においてあらゆる対立や矛盾は解消され、人間相互はその深い生命において一致に至るのだという[57]。ジョーンズは、ロイスの忠誠（loyalty）という言葉を援用しながら語る。

> By loyalty he [Josiah Royce] meant willing and thorough-going devotion to a cause which unites many selves into one organic community-self. ...The highest form of it, its consummate stage, is love. ...The “me” and the “mine” are swallowed up in the “us” and “our.” ...It is...a way of completion and fulfillment [of the self][58].（「ロイスにとって「忠誠」という言葉は、多くの自己を一つの有機的な自己へ結び付ける大義への意志的で徹底的な献身を意味した。…忠誠の最も崇高な形、最も完成した形は愛である。…そこでは「私」や「私のもの」は「私たち」、「私たちのもの」へ吸収される。…それが自己の完成、自己の充実への道である」。）

以上のような、ネオ・ヘーゲル主義的な自己による大いなる自己への回帰という自己充足的な理念、少し言葉を換えれば、神との親密性（近接性、近さ）という信仰的理想は、自由主義、福音派、保守派を問わず、現代のクエーカー研究者（その多くはインサイダーである）の無意識の前提、もしくは評価基準にもなっており、現代のクエーカー思想や研究の根底にある特徴と言っても良いだろう[59]。たとえば、クエーカー研究において指導的な立場にあるバーミンガム大学名誉教授のダンデライオン（Ben Pink Dandelion）の研究でも、クエーカーの歴史、各時代の信仰を積極的に評価する基準として、人間と神（もしくはキリスト）との“spiritual intimacy”の度合いを挙げている[60]。

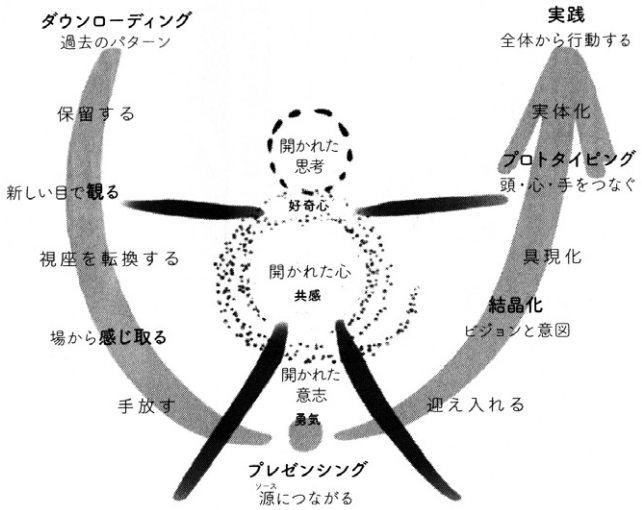
第三章　自由主義クエーカーの合議形式：U 理論の援用

第三章第一節　自由主義クエーカー信仰と U 理論

自由主義クエーカーの大半、つまり“Doughnut Quakerism”と称されるユニバーサリスト・クエーカーが持つ合議に関する見方に関しても定義を与えることは困難である[61]。個々人の信仰理解にはかなりの幅があり、それを反映して合議の理解モデルにも幅があるからである[62]。しかし、筆者がクエーカーの集会に出席し、感じた限りにおいて、多くの自由主義クエーカーは、「完全」の概念からではなく、近代の構成要件の一つである「寛容」[63]、もしくは「多様性の受容」の精神のもとに[64]、単に手続きに形式的に従いながら、タウンミーティングに近い業務集会を行っているように見える（なお、少数派のクリスチャン・クエーカーとユニバーサリストは、それぞれ「敵対者への愛」と「寛容・多様性の受容」の点で他者への態度において表面上は一致するため、合議で対立が顕在化することはほぼない）。上で言及したモーリーは、最近のクエーカーの業務集会が「集いの意識」を見出す場ではなく、“consensus”（合意）を形成する場になってしまったことに憂慮の念を示している[65]。その違いが何かと言えば、合意が結論を出すために理性といった知的能力をもって妥協や調整が行われる過程であること、結論が妥協の産物であるために議論参加者のコミットメントが浅薄になりやすいということである。一方、「集いの意識」は個々人や集会全体に配慮して、光の導きのもとに醸成される一致であること、全体が配慮されているがゆえに、議論参加者の力強いコミットメントが期待できるという[66]。

このモーリーの憂慮を如実に反映するかのように、昨今のクエーカーの合議形式モデルとして利用・代用されているのが、自己（self）への沈潜から新しい“（大文字の）Self/Authentic Self”を見いだす過程を経ることで、より多様な意見を反映できると称する U 理論である。“self”や“Self/Authentic Self”という用語からネオ・ヘーゲリズムや自己啓発セミナーの源流となったニューソートを連想させるが[67]、国連の経済社会理事会の諮問機関であるクエーカー国連事務室（QUNO：多様な政治的・思想的背景を持つ人々との対話の場でもある）でも実際に用いられている手法である[68]。U 理論は、MIT の senior lecturer である C・オットー・シャーマー（C. Otto Scharmer）が、約130名の起業家やイノベーターにインタビューすることで生み出された、如何にして人は革新的であり得るのかを説いたリーダーシップ・マネジメント論である。なお、シャーマーは、ドイツ観念論を通して思想形成したシュタイナー（Rudolf Steiner, 1861–1925）の影響を受けている[69]。このU理論が、クエーカー研究者ジョイセリン・ダーズ（Joycelin Dawes）によって、クエーカーの合議形式に応用できること、もしくはクエーカーの合議形式にとって有用なツールであると主張されて

いる[70]。しかしながら、U理論は他者との対話のための理論である反面、「自己」の成長物語（小さな自己が大きな自己になる物語）のようなところがあり[71]、対人スキルの自己変革の枠を超え出ていないように思える。またモーリーが指摘するように、合議にU理論が援用されたとき、それは中核的精神の抜けた単なる交渉術になる可能性が高い。図を参考にしながら、簡単にではあるが見てみよう。



図[72]

U理論のUというのは、上図のように過去（現在）の私、内面の私、未来の私への意識の動きをUの字型で表したものである。シャーマーによれば、「U理論は、人間の意識の進化という観点から、システム思考、イノベーション、変化を主導する」ものである[73]。具体的には、U理論は、今日のリーダーシップの盲点（blind spot）、つまり行動の源である「内面の状況」に目を向けさせ[74]、「**我々の行動の起点である内面の場を転換させる**[75]ことである」。それが「リーダーシップ、学習、聞き方の本質に根本的な影響を与える」という[76]。シャーマーの理論では、イノベーションを生み出すコア・プロセスとして、七つの段階が存在する。**（ⅰ）**まず「**ダウンローディング（downloading）**」である。過去のパターンから物事を見たり、聞いたりすることである。この段階にある限り、古い思考習慣と過去の経験に凝り固まり、新しいものが思考に入ってくることはない[77]。まずはこの段階を抜け出なければならない。**（ⅱ）**次が「**観る（seeing）**」である。ここでは習慣的な判断を**保留**することで、目の前の事実を新しい目で見るようになり、「新しいものに気づき、世界を自分の外側にある対象の集まりとして見る」[78]ことができるようになる。**（ⅲ）**三つ目の段階は、「**感**

じ取る（feeling）」である。対象から源へと変えることで（**視座の転換**）、認識が広くなり、深くなる段階である。相手の気持ちや状況が自分のことのように感じ取れるようになる[79]。ここで、「観察者と観察の対象との境界線が開かれる」ことになる[80]。**（iv）**四つは、「**プレゼンシング（presencing: presence+sensing）**」である。「過去の古いものを**手放し**」、自己の深みに沈潜し[81]、「自分を取り巻く未来の可能性の領域とつながる」段階である[82]。この段階で、未来（大いなる自己）が現れるという[83]。自分を超えた何かとの一体感である[84]。**（v）**五つは、「**結晶化する（crystalizing）**」である。新しいビジョンと「意図を**迎え入れ**、結晶化すると、観察者と観察の対象の関係が転換する」[85]。「そして、未来の場から（自らのエゴからではなく）ビジョンを描き始めることになる」[86]。**（vi）**六つは、「**プロトタイピング（prototyping）**」である。「プロトタイプを**具現化**しながら、行動することで未来を探ってゆく」[87]。**（vii）**最後は、「**実践する（performing）**」である。「自分たちの実践法やインフラを進化させることによって新しいものを**具体化**する」段階である[88]。

特殊な専門用語に違和感を覚えるかも知れないが、要するに一対一で働くとき、もしくはチームや組織で働くとき、対話が必要な場面では、相手の意見を自分の持つ古い思考で閉ざすのではなく、難しくとも自分を開き、自分の判断を一度保留（suspend）して、相手の立場に立って相手の意見を聞く。そうすると、古い自分の枠を超えて（意識が変容し）、外部から自分を見ることが出来るようになる。その結果、自分（self）の未来（シャーマーの言葉で言えば、大いなる自己（Self）[89]）とつながり、未来を予見できるようになる。そして、出来た未来の予見から、新しいビジョンが描けるようになり、そのビジョンを（大いなる自己という視点から）どのように具体化していくのかを探り、具現化させることで思い描いた未来が実現するというのである。

もちろんこうしたプロセスはある程度聞き慣れたものであるが、思うほど事は簡単には運ばないがゆえに、シャーマーは一つ一つの段階で詳細な解説を行い、数多くの逸話を挿入することで、読者がU理論に馴染めるように配慮している。しかし、対話理論、もしくはクエーカーの合議の代替策としては幾つかの欠点があり、まだまだ理論としては完全には体系化されていない。その点を含めて次節で検討しよう。

第三章第二節　自由主義クエーカーの合議形式とU理論の相違と問題点

ダーズは、こうしたU理論が、クエーカーの合議形式にとって有用であり、合議の持つ可能性を高めるものと主張する[90]。確かにジョーンズの提示する自由主義クエーカー信仰の形、もしくはそれすら形骸化して「自己」と「大いなる自己」との“intimacy”のみを求める現代の多様な信仰のあり方と、シャーマーの提示する理論

は構造的に非常に似ているゆえに、その親和性において論じるのは理解できる[91]。ダーズは、現代の自由主義クエーカーの合議形式についてU理論を参照枠として解釈・解説していく。ダーズによれば、クエーカーにおいて「**最善**」(the best) の存在としての「神」、「御心」、「内なる光」と呼ばれているものは、U理論では「出現する未来」(the emerging future) であり、「最高の未来の可能性」(highest future potential) のことである[92]。これらの最善の価値は、Uの字の最下部にある「**源**」(Source：もしくは「**内なる知識**」(inner knowing)) においてつながり得る[93]（それらは、「直感」、「心の内なる知識」、「自己の真性な高み」とも呼ばれ、心の最も深層の部分に存在する)[94]。なお、源とつながることは自己実現への道でもある[95]。またUの字の左側において、ダウンローディングや開けた態度（openness：具体的には、「観る」や「感じ取る」といった作業）などの過程を経て、最下部へと沈潜していき、静けさ（stillness）の状態に至ることは、クエーカー信仰における“centering down”（集会において、中心へと深まること）と同等の意味合いを持つ[96]。そして最下部に至ると、そこで内なる知識が生起する[97]。それは本当の自分、すなわち「**真性の自己**」(authentic Self) でもある[98]。そして最後に、Uの字の右側を上がっていくことは、「出現した未来」、「最高の未来の可能性」を通して得たビジョンから「最善」を実現していく過程である[99]。こうしたU理論的解釈は、聖霊の導きのもとに個々人の導きを見分けて、共同で（communally）決定を下すクエーカーの合議とは厳密には異なるものであるが[100]、それぞれの方法は良い意味での影響を相互に与えられると、ダーズは主張する[101]。たとえば、U理論は他者の意見を聞くことに関する詳細な理論を提示できるし、また「神」という言葉に慣れない現代の人々に世俗的な意味での代替案を提供できるという[102]。

ただ上述のジョーンズでの議論と同様の問題点が存在する。ダーズは、「源」や「内なる知識」を「直感」、「自己の真の高み」などに喩えながらも、実際には定義できないものと語る[103]。その一方で、別の箇所では、「源」は“higher consciousness”や“human consciousness”であると語り、「神」の概念とほぼ同一視している[104]（ここの議論には捻れがある)。ただしこの「神」は人格神としての神ではない[105]。つまり、ここでは、自己意識の深み（もしくは高度の意識）が（非人格神的な）神と同等であると主張されているのである。この点で、U理論は、ネオ・ヘーゲリズムやニューソートと同様に、自己が大いなる自己と一致する物語、もしくは自己から始まり大いなる自己で終える旅[106]という自己充足的構造を持つのは明らかである。それゆえ、たとえU理論が対話理論として実践・援用されたとしても、自己の意識の成長・変容に重点が置かれているため、ダイアローグではなく、単なるモノローグ的印象を拭えない（ダーズの議論では対話相手の存在が見えづらい)。とすれば、対話相手が

同じU理論に習熟しているか、もしくは彼／彼女が（心理的）返報性に従う場合[107]は別として、U理論が対話理論として有効に働くかどうかは判断が難しいところがある。

またその他にも問題点はいろいろある。U理論では「最善」のために対話（実際には、自己意識の成長）を進めるが、クエーカーの合議形式においては、神の御心を知り、それに従って業務を行うために集会を持つ[108]。またU理論ではリーダーの意識変容がキーポイントとなるが[109]、業務集会における書記は、リーダーではなく、あくまで司会者的・書記的な存在であり、議事進行を見守り、「集いの意識」を感じ取り、議事録をまとめる役割を持つ（決定責任は集会全体にある）[110]。さらには、聖霊（内なる光）の導きに当たるものは、U理論には存在しない。U理論では、チームや組織が掲げる課題の「最善」を成就することが目標となるが、クエーカーの合議形式では、沈黙を通して神の導き、つまり人間の理性や知性では計り知れない領域（計算不可能性）への開けが中核となっており、単なる計算だけでは解決できない問題について思いもよらぬ洞察を得ることを求めている。ユニバーサリストが多数を占める集会であっても、まだまだ理念としてそうした開けの態度を保持しているが、モーリーが指摘するように、計算可能な領域で決定が行われてしまうことも多い。

要は、現代の自由主義クエーカーにおいては、信仰が形骸化し（特に「完全」の精神の欠如）、業務集会における合議も理性や知性による交渉に陥っており、それがさらにU理論といった世俗の対話理論によって強化されている状況がある。人間は一つの理論だけで動くのではなく、あらゆる習慣や慣習、儀礼や知識に従うものであり、その点で、U理論もそうした事柄によって無意識に補われながら、事をうまく運ぶのだと考えられるが、自己充足・自己実現的な解釈モデルに従う限り、U理論、またU理論によって補強された自由主義クエーカーの合議は、異質な他者の存在を前提とする対話の場、組織的一致の場のためのセオリーとしてはうまく機能しない構造を持つと言える。

おわりに

クエーカー信仰は、大きく二つ、細かくは四つのカテゴリーに分類される。現代の自由主義クエーカーの集会は、その四つのカテゴリーのうち、主に「キリスト中心主義（クリスチャン・クエーカー）」と「ユニバーサリズム（ユニバーサリスト・クエーカー）」が混在した状況にある。こうした信仰類型の相違を反映して、彼らの業務集会についてのストーリー解釈も異なる。少数の前者のクリスチャン・クエーカーの解釈は、伝統的なクエーカーの合議形式に沿って、つまり沈黙の内に祈りを合わせ

て、話し合い、最後の最後まで異質な意見に開かれて（「完全」）、最終一致を目指すというものである。一方、多数を占める後者の解釈は、個々人によって大きく異なるため簡単には定義できないが、近代の精神の一つである「寛容」、「多様性の受容」を軸に、合議の形式に沿って、議論を行っているようである。クエーカーの合議形式は、世俗の組織でも用いられるようになっているが、同時に世俗の理論によって説明・補強されるようにもなっている。その一つの例が、ダーズが主張するように、クエーカーの合議に対するU理論の適用である。現代の自由主義クエーカーは、20世紀初頭以来、これまでの伝統を断ち切り、ネオ・ヘーゲリズムを基盤にして、信仰の近代化を推し進めた。結果、それまでの信仰とは性質の異なる、自己から始まり大いなる自己で終わる自己充足的・自己回帰的な信仰になり、信仰の目的は自己実現になった。こうした信仰形態にまさにぴったりとはまり込むかのように、同じくネオ・ヘーゲリズム的、ニューソート的なU理論が適用され、そこから合議が行われている現実がある。U理論は、提唱者のシャーマー自身が言うように、「自己の旅の物語」である。すなわち、自己の成長、つまり自己意識の変容によって対人関係をうまく進めることを目的とした理論である。それは、自己の内面に沈潜し、大いなる自己とつながることで、新しい可能性を開くというものであるが、理論的観点から見れば、そもそも対話相手としての異質な他者の役割が見えづらく、自己完結した自己充足・自己回帰的な構造を持つ点で、他者との対話理論としては難点があると言えるだろう。

注

1　本研究は、JSPS科研費JP16K02188の助成を受けたものである。

2　業務集会についての最初の提言は、William Dewsburyの1652年の書簡においてである（Howard H. Brinton, *Reaching Decisions: The Quaker Method* (Wallingford, Pa: Pendle Hill Publications, 1952, p. 4)

3　*Ibid*, p. 3.

4　Michael J. Sheeran, *Beyond Majority Rule* (Philadelphia, Pa: Philadelphia Yearly Meeting of the Religious Society of Friends, 1983).

5　Anthony Bradney and Fiona Cowie, *Living Without Law: An Ethnography of Quaker Decision-Making, Dispute Avoidance and Dispute Resolution* (Aldershot: Ashgate Publishing Company, 2000).

6　Gray Cox, *A Quaker Approach to Research: Collaborative Practice and Communal Discernment* (Belize: Produciones de la Hamaca, 2014).

7　拙稿「ルーファス・M・ジョーンズの宗教思想―自己意識と意識する神―」、『基督教研究』、第76-1号、2014年：47–63。

8　The Yearly Meeting of the Religious Society of Friends (Quakers) in Britain, *Quaker Faith & Practice*, 5th ed. (Dorchester: The Dorset Press, 2013), article 2.01.

9　Sheeran, pp. 74–75.

10　実際の呼び方は「クエーカー・ユニバーサリスト」（Quaker Universalists）であるが、他の用語との整合性のため、ここでは「ユニバーサリスト・クエーカー」と呼ぶことにする。

11 Sheeran, pp. 75–76.

12 *Ibid*, p. 86.

13 Robert Barclay, *An Apology for the True Christian Divinity*, stereotype ed. (Philadelphia. Pa: Friends' Book Store, 1908), p. 227.

14 George Fox, *The Works of George Fox*, Vol. VIII (Philadelphia, Pa: Marcus T. C. Gould, 1831) p. 231; Barclay, *Apology*, pp. 132–133; Cecil E. Hinshaw, *Apology for Perfection* (Wallingford, Pa: Pendle Hill Publications, 1964), p. 17.

15 Yasuharu Nakano, 'Self and Other of the Theology of Robert Barclay', PhD dissertation submitted to the University of Birmingham, 2011, pp. 130–132.

16 Beth Allen, *Ground and Spring: Foundations of Quaker Discipleship* (London: Quaker Books, 2007), pp. 40–41; Robert Halliday, *Mind the Oneness: The Foundation of Good Quaker Business Method* (London: Friends Home Service, 1991), p. 6.

17 Barclay, *Apology*, p. 536; Allen, p. 40–41.

18 Barclay, *Apology*, p. 536.

19 *Idem*.

20 Robert Barclay, 'The Anarchy of the Ranters, and other Libertines' in *Truth Triumphant* (London: Thomas Northcott, 1692), p. 227; Barclay, *Apology*, p. 173.

21 Barclay, *Apology*, pp. 262–263, p. 279; Barclay, 'Anarchy', pp. 202–203.

22 Barclay, *Apology*, 289 and 311; Sandal L. Cronk, *Gospel Order: A Quaker Understanding of Faithful Church Community* (Wallingford, Pa: Pendle Hill Publication, 1991), p. 7, 21, 25, 31, 34 and 36.

23 Barclay, *Apology*, p. 264.

24 George Fox, *A Journal of George Fox*, revised ed. (Philadelphia, Pa: Religious Society of Friends, 1997), p. 263; Barclay, 'Anarchy', p. 216; Halliday, p. 15; Cronk, pp. 11–12, p. 16 and 20.

25 「クエーカーの業務集会の実践には、クエーカーの価値観を生き抜く努力が含まれる。…平等、簡素、平和、そして真理である」(Jane Mace, *God and Decision-Making: A Quaker Approach* (London: Quaker Books, 2012), p. 122)。See also Mace, pp. 63–71; Halliday, p. 13.

26 Brinton, p. 14.「決定が行われたからといって、それが無謬であるというわけではない」(Mace, p. 44)。

27 拙稿「王政復古期クエーカーの教会論に関する理論的考察 ―バークレー神学を中心に―」『基督教研究』、第79-1号、2017年、30–31頁、38頁 ; Cronk, p. 19.

28 Robert Barclay, *A Catechism and Confession of Faith* (Philadelphia, Pa: Friends' Book Store, 1878), p. 86.

29 Barclay, *Apology*, p. 138; Joycelin Dawes, *Discernment and Inner Knowing: Making Decision for the Best*, 2nd ed. (N/A: FeedARead.com Publishing, 2017), p. 41. Cf. Paul Tillich, *Systematic Theology*, vol. 3 (Chicago: Chicago University Press, 1963), p. 112.

30 「我々が神の関心のもとに業務、つまり世俗の働きよりも神の働きを遂行する際、我々は世が求める速度で働きを進めることを求められてはいない。宗教的な導きに完全に従うことこそが我々の第一の責任である」(Christine A. M. Davis, *Minding the Future* (London: Quaker Books, 2008), p. 62)。See also Mace, pp. 25–27, p. 57.

31 Barry Morley, *Beyond Consensus: Salvaging Sense of the Meeting* (Wallingford, Pa: Pendle Hill Publications, 1993), p, 16.

32 Morley, p. 16.

33 *Ibid*, pp. 17–19.

34 Halliday, p. 10.

35 Morley, p. 19, 23, and 30. See also Patricia Loring, *Listening Spirituality*, vol. II (Philadelphia, Pa: Quaker Books of Friends General Conference Bookstore, 1999), p. 86.

36 業務集会が成功するための環境的要素として、マーガレット・ヒースフィールド（Margaret Heathfield）は、人々が互いに良く知り合っていること、集会での手続き（段取り）に習熟していることなどを挙げている（Margaret Heathfield, *Being Together: Our Corporate Life in the Religious Society of Friends* (London: Quaker Home Service and Woodbrooke College, 1994), p. 92）。「集会のメンバーは、聖霊の働きを知り、お互いを知り、意思決定の方法と業務を遂行する方法を知らねばならない」(Halliday, p. 38）。See also Brinton, pp. 19–20; Mace, p. 28, pp. 42–46.

37 Sheeran, p. 55; Dawes, p. 25; Lon Fendal, Jan Wood, and Bruce Bishop, *Practicing Discernment Together: Finding God's Way Forward in Decision Making* (Newberg, Or: Barclay Press, 2007), p. 83.

38 Ben Dandelion, *An Introduction to Quakerism* (Cambridge: CUP, 2007), p. 134.

39 ハワード・H・ブリントン『クエーカー三百年史』、基督友会日本年会、1961年、9頁：ピンク・ダンデライオン『クエーカー入門』、中野泰治訳、新教出版社、2018年、9頁。

40 ダンデライオン、115頁。

41 Dandelion, p. 134.

42 ダンデライオン、132頁。

43 Morley, p. 2.

44 Leonard Joy, *How Does Societal Transformation Happen?* (Belize: Produciones de la Hamaca, 2011), pp. 60–63; Adrian Cairns, *Of One Heart Diverse Mind: The Quaker Universalist Way* (London: Quaker Home Service, 1994), pp. 8–11 and 16–18.

45 Cairns, pp. 8–11.

46 拙稿「クエーカー研究における新ヘーゲル主義的前提について —self 概念を巡る Barclay 神学の評価—」『ピューリタニズム研究』、第6号、2012年：27–39。

47 ジョーンズは、自らの著である *Religion as Reality, Life and Power* (Philadelphia, Pa: Walter H. Jenkins, 1919) の中で思想的影響を受けた人物としてこれらのネオ・ヘーゲル主義者を挙げている。その他、彼が影響を受けた人物としては、William James(1842–1910)、Cambridge Platonist の Benjamin Whichcote (1609–83)、John Smith (1618–52) などがいる。

48 Dandelion, *An Introduction to Quakerism*, p. 132; Martin Davie, *British Quaker Theology Since 1895* (Lampeter: The Edwin Mellen Press, 1997), pp. 140–141.

49 Jung Jiseok, 'Quaker Peace Testimony, Ham Sokhon's Idea of Peace and Korean Reunification Theology', PhD dissertation submitted to the University of Sunderland, March 2004, p. 45 and 62; Thomas C. Kennedy, *British Quakerism 1860–1920: The Transformation of a Religious Community* (Oxford: OUP, 2001), p. 361.

50 Rufus M. Jones, *A Dynamic Faith*, 3rd ed. (London: Headley Brothers, 1906), p. 6.

51 Jones, *Dynamic Faith*, p. 6; Rufus M. Jones, *The Message of Quakerism: Two Addresses* (London: Headley Brothers, 1901), p. 13 and 14; William C. Braithwaite, *Spiritual Guidance in the Experience of the Society of Friends* (London: Headley Brothers, 1909), p. 23, pp. 26–27.

52 Jones, *The Message*, p. 12; Jones, *Dynamic Faith*, pp. 4–5.

53 Jones, *The Message*, p. 24.

54 Rufus M. Jones, *Religion as Reality, Life and Power* (Philadelphia, Pa: Walter H. Jenkins, 1919), p. 21; Jones, *Dynamic Faith*, p. 88.

55 William C. Braithwaite, *The Second Period of Quakerism*, 2nd ed. (Cambridge, Eng: CUP, 1961), p. 395; Braithwaite, *Spiritual Guidance*, p. 81.

56 Jones, *Religion as Reality*, pp. 13–14.

57 *Ibid*, pp. 20–21.

58 *Ibid*, pp. 24–26.

59 Cf. Nikki C. Tousley, 'The Experience of Regeneration and Erosion of Certainty in the Theology of Second Generation Quakers: No Place for Doubt?' (Unpublished MPhill Dissertation submitted to the University of Birmingham, 2002); Hugh S. Pyper, 'Resisting the Inevitable: Universal and Particular Salvation in the Thought of Robert Barclay', *Quaker Religious Thought*, vol. 29, No. 1, (1998): 5–18.

60 Dandelion, *An Introduction to Quakerism*, p. 5. なお、次の言葉は、ジョーンズのみならず、現代クエーカー一般にも当てはまる。「神の超越性を忘れ去り、…神の内在［神との近さ］をあまりに強調しすぎることによって、我々は神の荘厳さ、神秘、そして神の変革する力を失ってしまった」（William A. Cooper, 'Reflections on Rufus M. Jones Quaker Giant of the Twentieth Century', *Quaker History*, vol. 95, no. 2, 2005, p. 38）。

61 Joy, p. 59.

62 上述のジョーンズは、自由主義クエーカー思想のイデオローグにもかかわらず、極めて形式的な形でクエーカーの合議形式について叙述するだけである。そこに見られるのは合議の手続きについての描写だけで、伝統的なキリスト教に裏打ちされた合議の精神については、曖昧な「愛」という言葉以外あまり述べられていない（Rufus M. Jones, *The Faith and Practice of the Quakers* (London: Methuen & Co Ltd, 1928), pp. 65–69）。

63 Cairns, p. 25.

64 ジョーンズの *Social Law in the Spiritual World*（1904）が先鞭をつけたリベラル教会の出版キャンペーンによって、20世紀前半の米国では「寛容」などを含むリベラル的価値が浸透した。リベラルな価値は、神学や宗教に疎いユニバーサリスト・クエーカーにも共有されていると考えられる（Matthew S. Headstrom, *The Rise of Liberal Religion: Book Culture and American Spirituality in the Twentieth Century* (NY: OUP, 2013）。

65 Morley, p. 5 and 14.

66 *Ibid*, pp. 5–6, p. 11–13.

67 Dawes, p. 83.

68 *Ibid*, pp. 107–109.

69 Ｃ．Otto Scharmer, *The Essentials of Theory U: Core Principles and Applications* (Oakland, Ca: Berrett-Koehler Publishers, 2018), p. 20（C・オットー・シャーマー『U 理論［エッセンシャル版］』、中土井僚、由佐美加子訳、英治出版、2019年、56頁）。

70 Dawes, p. 110.

71 「本書は、…自己の旅の物語である。自己とは、この場合、私自身だ」（シャーマー、23頁）。

72 Scharmer, p. 24（シャーマー、61頁）。

73 *Ibid*, p. ix（同書、17頁）。

74 *Idem*（同書、19頁）。

75 *Ibid*, p. xii（同書、20頁。引用部の太文字は原文通り）。

76　*Idem*（同上）。
77　*Ibid*, p. 24（同書、61頁）。
78　*Idem*（同上）。
79　中土井僚「「出現する未来」から学ぶ ―U理論で組織を変える―」『人材教育』、日本能率協会、vol. 24, no. 5. (2012)、45頁。
80　Scharmer, p. 24（シャーマー、62頁）。
81　*Ibid*, p. 21（同書、58頁）。
82　*Ibid*, p. 24（同書、62頁）。
83　*Ibid*, p. 24（同上。引用部の太文字は筆者）。
84　中土井、43頁。
85　Scharmer, p. 24（シャーマー、62頁。引用部の太文字は筆者）。
86　*Idem*（同上）。
87　*Ibid*, p. 25（同上。引用部の太文字は筆者）。
88　*Idem*（同上。引用部の太文字は筆者）。
89　「精神的断絶は**小さな自己**（self）と**大きなSの自己**（Self）との分離、言い換えれば**今日**の私と**明日**なるかもしれない私、私の最高の未来の可能性との分断から生じる」（同書、40頁）。引用部の太文字は原文通り。
90　Dawes, p. 110.
91　*Ibid*, p. 13.
92　*Ibid*, p. 9, 16, 25, and 49.
93　*Ibid*, p. 5 and 78.
94　*Ibid*, p. 78.
95　*Ibid*, p. 82.
96　*Ibid*, p. 13, 17, 19, 22, 35, 39, and 45.
97　*Ibid*, p. 17.
98　*Ibid*, p. 14.
99　*Ibid*, p. 14, pp. 78–79 and 97–98.
100　*Ibid*, p. 21, 29, 31, 33, and 50.
101　*Ibid*, pp. 110–118.
102　*Ibid*, p. 56, 110, 113, and 118. pp. 58–60 and 86–87.
103　*Ibid*, p. 113.
104　*Ibid*, p. 78 and 84, pp. 80–81.
105　*Ibid*, p. 80.
106　Scharmer, p. 95（シャーマー、156頁）。
107　たとえば、こちらが心を開けば、相手も心を開くなどのような事例である。
108　Dawes, p. 79.
109　*Ibid*, p. 92.
110　Sheeran, p. 95; Howard H. Brinton, *Guide to Quaker Practice*, new ed. (Wallingford, Pa: Pendle Hill Publications, 1950), pp. 30–36.